

地球 第八卷第五號

昭和二年十一月一日

九州刀工分布の歴史地理的意義(下)

小川 琢 治

四

薩摩の古刀工は波平一家が古くから榮え、今も鹿兒島市の南一里餘の海岸に波ノ平の村落がある。此處に橋口氏が元祖正國以來連綿として近年まで續き、その系圖によれば正國は永延又は承元の頃大和から來たといふは傳説に止るも、源平盛衰記一ノ谷の戦に越中盛俊をだまし打ちにした猪俣近平六則綱の刀は薩摩國住浪平作なりとあるから、その起源の承元より古いことが推知される。然れども之と同時に三條宗近が流寓して正國から業を受けて都に還つて名工の聲譽を得たといふ傳説も亦た信を措き難い。

薩摩半島は地理的に獨特の位置を占め、その南の端の坊ノ津は一名唐ノ港といひ、伊勢阿濃津、筑前博多ノ津と共に三津として聞え、西南の突角に於て帆船の風波を避ける適好の小灣であつた。その大陸交通の歴史は明の武備志などに見えた以前に溯る資料はない様であるが、豊後水道を經由する唐宋交通の航路が開ける頃にも必ず一要港であつたと想像される。

姑く此等の想像から離れて我々の波ノ平物の銘文に就いて檢出し得た所は左の如く

薩摩國浪平鍛冶工人菰伊美吉正長作

滋賀宮即位八年己巳十二月丙子朔上之

薩摩國浪平鍛冶工人正次作

神龜四年丁卯冬十二月戊辰朔上之

大齊鄴都碁母懷文七世孫正次淬之、子正國正包鍛之

等があつて、菰と清原とを重ねて刻むのから推して、清原姓を冒し、菰氏と稱したかと想はれる。傳説の元祖正國以前に天智天武兩帝の時代に正長正良正衡正次正行正包等の諸工があつたらしい。而して此等の諸工は菰ノ伊美吉(忌寸)を冠し、その祖先を北魏北齊の間に歷任した碁母懷文なりと稱し、菰は碁母の古日本音である所から推せば、漢字の姓をそのまま襲用したことが明かとなつた。北史(卷八十九)碁母懷文の傳にその宿鐵刀を鍛造した事蹟を傳へ、

懷文造宿鐵刀、其法燒生鐵精、以重柔鋌、數宿則成剛、以柔鐵爲刀脊、浴以五牲之溺、淬以五牲之脂、斬甲過三十札、今襄國冶家所鑄宿柔鋌、是其遺法、作刀甚快利、但不能頓截三十札也、といひ、剛柔二種の鋼を打ち重ねる鍛鍊法を傳へたといふ。

波ノ平物の特色は地肌立ち砂流しがあつて、大和物、北國物と類似すると諸傳書にいひ、祖先の大和から來たとの傳説に一致するから、強辯すれば奥州鍛冶の系統に屬し、北方肅慎渤海の交通が奥羽と直接に行はれ時代に碁母氏の後裔と稱するものが、この徑路を辿つて奥州から大和に來り、

終に九州の果まで移住したと考へられないではない。然れども隋唐交通以前の紀年銘を伴ふものが見當らぬ所からいへば、隋の南朝を平げた頃高麗が半島に割據して日本との直接交通の便が絶えた際に、浙江海岸への直航路が開け、この交通線に當る薩摩の位置が大陸文化輸入の一門戸となり、因つて刀工の直接移住が起つたと考へる方が或は真相に近いかも知れぬ。

況んや波ノ平は櫻島火山に對し、石川(成章)理學士の踏査によれば安山岩の磁鐵礦から導かれた砂鐵が手近い海岸に發見される處であるから、此處に來着した刀工がこの原料産地に定住して鍛冶業を始めとした方が、遙々幾多の砂鐵ある海岸を経て九州最後の一角まで辿り着いたとするよりも遙かに妥當である。而して此の海角の刀劍が大陸輸入品を尊重する奈良朝廷に聲價を博し得ることも容易に了解される所である。好尙の變化した後世に下作とされたものが源平時代の關東武士の指料として誇つてゐたとの傳説は、同じく此の歴史地理的位置の意義を説明して餘りある。

之を要するに我々は奈良朝に波ノ平に鍛冶工業が榮へたのは大陸直航路の開けた時期を表徴する好箇の紀念と考へてよいと信ずる。

五

九州第一の要津は博多ノ津で三韓の初から衛戍と應接の爲めに大官を駐在せしめた海陸要衝の地點を占め、鎮西の警備に必要な兵器供給の關係から筑紫鍛冶の中心となるべきである。然るに平安朝を通じて名工が此處に居つた傳説がなく、之に反して三池鍛冶の奉獻銘に香椎神宮にさへげたのを見る。故に三池と彦山宇佐等に鍛刀工業が榮へてゐて、多くは此等の産地から供給され、又た

此處に移住した刀工がゐても本國を稱して聲價を維持しつゝあつたのでないかと想はれる。

此處に出た名工は左一家で宮崎入幡宮に近い息ノ濱オキに住し、その初代良西、二代西蓮、三代實阿共に法名を通稱とする。單にこれのみから推せば宇佐入幡の勸請された前後に宇佐の修験者が此處に定住したものでその勃興は文永弘安の蒙古襲來と離る可らざる關係あると想はれる。

然れども隱銘に據れば

筑前國鍛冶工人多多良(羅)忌寸高嶺碎之

といふ天平勝寶三年(七五一年)の造銘ある刀工がゐた。此の如く多々良は香椎神宮の所在地に近く博多刀工中の最も古い一人が偶然知れた。多々良氏が大陸歸化人たるはいふまでもないが、此の刀工は自ら

太原府鍛冶工人岑崇八世之孫

と稱した銘文もあつて、百濟人に非ずして漢人なりと威張つたらしい。

尙ほ西蓮の隱銘に

多多良忌寸高嶺十五世孫左衛門太郎國吉

と讀めるのがある所から見れば、左一家は此の多々良鍛冶高嶺を祖とし、その中間四百餘年間に幾多の刀工がゐた筈である。今我々の讀み得たのは西蓮實阿等の隱銘ある大磨上物一刀のみに限られ甚だ不十分なるを免れぬが、筑前物の系統を奈良朝まで溯り得たのは意外の收穫である。

多多良は韃靼とも書き鍛冶の用具の一つで、地名の語源が鍛冶の居住に因なむだことは言ふまでも

ない。周防山口の大内氏の祖先は百濟琳聖太子で、欽明天皇の御宇に多多良ノ濱に來住し、將來した珍寶を獻じて、地を今の山口の近傍に賜はり地方の豪族となつたといふ傳説がある。之に従へば輔といふ地名の百濟人居住と關係あることは明かである。前に三池刀工の始祖が百濟俘囚漢人首秦熊と切つた隱銘の讀み方に誤りなしとせば、繼體天皇の頃に既に百濟を経て漢人刀工が渡つて來たのであるから、傳説にいふ欽明天皇の頃三韓交渉の頻繁なる時に同じく漢人刀工が來住して盛んに兵器を製造したと考へられる。隱銘の發見まで彼等の事蹟が全く忘れられてたのは恐らくは三韓經略の止み兵器の需要の衰へたこと、隋唐交通線路が半島を經由せぬ爲めに博多附近大陸交通の門戸たる價値の減じたこと等により、鍛刀工業が以前の盛況を見ぬに至つた結果と推測される。

多々良氏一族の來住と離れ難いのは妙見信仰であつて、その渡來は移住に先つたといひ、周防に妙見菩薩が降つた時に處々を轉徙して終に今の下松クニマツに鎮座したといふがこの傳説は宇佐八幡神の神座の遷移と趣を同くしてゐる。西蓮等が僧侶の刀工なる事實は或は單に老年佛道に入る當年の流行に従つたものではなく、妙見に奉仕する兩部神道又は修驗道に屬し、彦山宇佐の鍛冶と同じ位置に在つたかと想はれる。

六

鎌倉幕府になつてから後に筑前に左の一門から別れた金剛兵衛盛國一家、大石家永一家、豊後に大和千手院の高田友行一家、京了戒一家が起り、尙ほ肥前に平戸左盛廣、諫早則行則末の一家があり、特に肥後菊池の延壽一家が南北朝の時に九州征西將軍府を擁護した菊池氏と共に著名である。

鎌倉室町兩時代を通じて九州は戦争が何處よりも頻繁に起つた地方で、文永弘安の兩役續いて南北兩朝に屬する豪族の戦鬪に寧日なく、南北合一の後に至つては八幡船が海外に發展しつゝ戰國時代に入つたのである。故に此等の事件と關聯して兵器雷給の關係から鍛刀工業の盛大なりしを察するに餘りある所で、此の間に九州に多數の刀工が出たのは當然である。

其中延壽一派の祖先は大和千手院弘村ともその子國村とも言ひ傳へ、何れかゞ京來國行の婿であるといふのは京物の特色を維持した點から正しく見える。故に其の鎌倉時代以後の移住に關して茲に絮說せぬ。

唯前稿(第三卷第五號)に京物に關して述べた時に未だ盡さなんだ奈良京三條大宮、平安京三條及び來の三派の聯絡に就いて茲に追補する。

京來一家は流布本系圖では國吉を元祖とし、或は尙ほその父國明(寛元)まで溯るが、鎌倉時代に至つて平安京に起つたとし、その祖先を漠然と高麗人といふに止まる。此の大陸歸化人といふ傳説は南洞院本古記(應永三十年間本)に載せた頗る古いものであるが、その詳細は何れの傳書にも見當らない。此頃菊池千本槍の隱銘を調べる間に偶然

今來國光廿世孫國時

とあるのを發見したので、大約六百年以前の奈良刀工國光の末孫たることが明かとなつた。

又た此の奈良來國光の在銘物は鶴首造の刀子に發見した外に、宗近の追銘を切つた細身の大刀及び和州行光在銘の小太刀にも半顯銘として明瞭に讀めたのみであるが、その顯銘には

と來字の代りに末を用ゐ、且つ光の字が反文(左り文字)になつて見える。而して其上に今の字が隱顯何れの場合にも明かに認められ、姓氏錄に見えた今來即ち新來住歸化人の氏たることは疑がない尙ほ此の外に三條吉家の隱銘の讀める刀に

大厩長安京鍛冶工人王國琛□世孫國□。

といふ刀子その他の三刀と共通の銘も發見された。此等を綜合すれば京物の系統は三條一家と大宮國盛との關係に就き前稿(第三卷五一九頁)に述べた所よりも一層明白になる。

此の一派の自から今來と稱するのは前稿に述べた多數の奥州刀工が大和に先づ來住してから、後れて來着した事實を語るものゝ如く、その高麗歸化人なりといふ傳説は隋唐交通の開けた後に來た徑路を語るものゝ如く見え、唐高宗の高麗征服後即ち天武天皇御宇に屢高麗使節の入貢があつた頃と考へるのが至當らしい。

今來といふ語は新來者輕蔑の意味が含まれてゐるかど疑はれ得る。然るに自から之を標榜したのは恐らくは唐代の大陸文化の最も隆盛なる時に長安有名の鍛冶なりと、全く反對の意味に誇稱したものの想はれる。恐らくは此の新舶來の一派が群を抜いて洗練した作風を發揮し、他の流派を壓倒して日本鍛刀術に新らしい時期を開いたのであらう。

粟田口一家及び大和當麻一家も亦た國の字を冠する刀工が多い。その中粟田口諸工の隱銘には『王國琛幾世孫』と切るものを發見した所から推して今來氏の末葉であると推定され、此の一家が

大和から来たといふ傳説は奈良京三條大宮住者の方が始祖たるを語るものと想はれる。當麻物に此と同じ始祖銘を切つてゐるか否か未だ確め能はぬが、來粟田口兩派が共通の祖先から出た類例から觀れば是れ亦た同系の一別派でないかと推測される。

之を要するに鎌倉時代に入つて互に獨立したこの三派は源流が一つで、隋唐交通が始まつた後に被つた大陸鍛刀工業の影響を反映するものと推測され、而かしてその相互の作風の異なるのは平安朝の間に變遷發達した所に過ぎぬらしい。而してその中の粟田口と備前一文字との類似の如きは承元番鍛冶の諸國から平安京に集つた時に互に受けた影響あるべきも、備前實成友成等の上洛した頃にも同様の關係があつたことが同じく想像に難くない。

七

茲に本稿を結ぶに當り再び出發點を顧みて辿り來つた日本鍛刀術發達の徑路が我々に指示する事項を綜括して起草の趣旨と獲た結果とを明かにせねばならぬ。

我々の磨滅した點畫から古い銘文を復原せんとする努力は恐らくは今日までの因襲的鑑定を尊重する刀劍家には十分に評價されまいが、若し在銘物の裏銘即ち太刀の帶裏又は短刀の指裏に在る紀年隱銘を検索されるならば、我々の立脚點が想像する如く根據の薄弱なるものでないことが容易に了解されると信ずる。故に我々は自分の研究法に依り獲た結果が必しも絶對的正確を期し難い事情あるに關らず、之を假定して日本刀工の流派をその淵源に溯る途を開くのが決して徒勞でないと思ふ。

我々の隱銘の研究により獲た第一の結果は月山舞草兩派の刀工が平安朝以前に優越の位置を占めたことで、奥羽地方の肅慎渤海との交通によりこの地方に大陸文化が近畿地方を經由せず直接に流れ込んだ一つの紀念物が刀劍たることを推定せしめた。此の交通が我々の溯らんとした所よりも更に上古に既に行はれたことは此頃内田(寛一)文學士の秋田地方を踏査して漢武帝を祭る神社あること、五銖錢が發見されたこと、等を明にしたのと、喜田博士の奥州に鬲(中空の三足を持つ鼎)形の土器の存在を確かめられたことにより彌明瞭となつた。

第二は大和朝廷の刀劍が此の地方の所謂倅囚刀工により製作され、その移住により近畿中國等の鍛刀工業が次第に發達し、大和宇多の天國、播磨小川の實頼等が輩出し、播州から伯耆備前等に蔓延した形跡を追跡し得たことであつた。

此等の箇々の鍛刀工業の中心は何れも原料たる鐵鑛供給と製品の需要との關係で盛衰あつて、備前はその中でも便捷の位置を占めた爲めに平安朝以後最大の發展を遂げたものである。

第三は鎌倉に興つた鍛刀工業は備前國宗助眞粟田口國綱等の移住に先ち、元暦幕府の創設文治與州征伐と前後して舞草鍛冶の平泉一派が既に来り、山内莊鍛冶ヶ谷に於て兵器供需に従事し、その中に舞草信房、貞國、國弘等の名工がゐたことで(史林第 卷)是れは承元番鍛冶の平安京に新らしい鍛刀術の氣運を漲らせる前即ち相州作風が天下を風靡する百五十年前に既に起源することを意味する。

今茲に九州鍛冶の起源を探究した結果として、朝鮮半島を經由する大陸交通の門戸たる九州に北

魏の刀工が來着し、修驗道と共に彦山宇佐等に筑紫鍛冶の一派が早く興り、築紫國造磐井の根據地に近き三池にも亦た秦氏を名乗る一派が之と並び、博多の要津に近き多多良に左一家の祖先たるべき多々良一派が來着し半島を経由せざる南支那との直航路が開ける頃に薩摩に波ノ平一派が興つたことを知つた。此の最後の隋唐交通時代に入つて長安刀工王氏の一族が奈良の三條大宮鍛冶となり三池一派からは河内秦包平一派となつて、共に奥州系の諸派の中へ新派を興して、平安朝の鍛冶刀工業の新時期を開いた徑路が略ぼ明かとなつた。

此等を通觀すれば滿洲經由と半島經由との兩交通線が各我が群島の文化生活に最も古く影響した意義を明かにする一端となり、最後の南朝及び隋唐との南支那經由の航路の開通後に流れ込んだ文化の潮流が奈良平安兩京に及ぼした影響が一層深大で、今日まで持て囃される多くの名刀は此等の交通の紀念物と看做すべきものである。その歴史地理的意義は此等の刀工の地理的分布に依り、徑路に當る地點が決定される事實に在る。

以上述べた所に古い半島への沿岸航路に當る山陰道及び若越の日本海沿岸が尙ほ漏れてゐる。此の地方の交通に關する材料が我々の研究法により獲られると期待されるが、今は其の研究の暇を得ないから是を他日に譲る。(完)